

ふくしおおさか

～ 出かける つなぐ 創る～



©TOMONORI TANIGUCHI 2018
この絵は、さまざまな“ちがい”をもつ人びとが、互いに認めあえる共生社会をイメージしています。

介護職への

キャリアチェンジ



詳しくは2面へ

焦点



Fukushi Osaka Column

近年、地球温暖化や気候変動の影響により日本における四季のようすが変わってきた。本来、日本の四季は春夏秋冬が明確に分かれており、四季ごとに自然の美しさや旬の食材、季節の行事により我々の生活文化に根づいてきた。

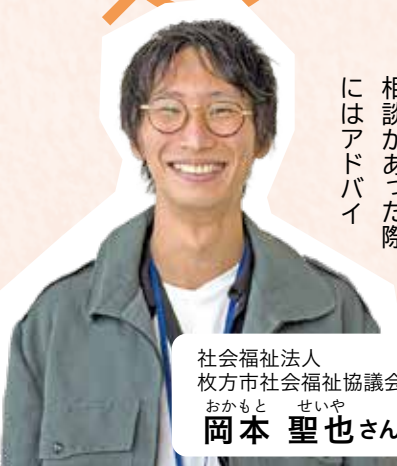
しかし、現在は異常気象により四季のバランスが崩れはじめた。秋には朝夕の寒暖差が生じず、紅葉の時期が遅れ、色づきも悪くなる現象が報告されている。また、この異常気象の影響は動植物にも影響を与えるだけでなく私たちの生活にも直結する重大な問題だ。

今後、「二季化」と呼ばれる現象に日本が近づいてつれ、もしかすると、それはその良さもあるかもしれないが、次第に四季折々の楽しみが忘れ去られていくのではないかと危惧している。

【美】

笑顔 咲かせる人

ズームアップ ZOOM UP! vol.38



社会福祉法人
枚方市社会福祉協議会
おかもと せいや
岡本 聖也さん

現在、CSWとして担当地区をもち、個別支援や地域支援を行っています。困りごとを抱えている人の相談を受け、アセスメントを行い適切な支援につなげています。また、地域のサロンに出張相談というかたちで参加し、住民が気軽に相談できる仕組みを整えています。

他にも、校区福祉委員会会長からサロン活動について相談があった際にはアドバイ

このコラムでは、福祉の職場で働く人を紹介し、仕事や人の魅力を伝えます。
今回登場するのは、入社2年目の岡本さん。やりがいや今後の抱負について聞きました。

★その人の生活に関わる仕事

人と関わる仕事がしたいと考え、大学卒業後は一般企業の営業職に就職。お客さんと接する中で、会社の商品を通して関わりではなく、相手の生活をより良くする関わりをしたいと考えるように。地域のさまざまな人と関わるができる社協に転職しました。

★活動しやすくなるようコーディネート

現在は、CSWとして担当地区をもち、個別支援や地域支援を行っています。困りごとを抱えている人の相談を受け、アセスメントを行い適切な支援につなげています。また、地域のサロンに出張相談というかたちで参加し、住民が気軽に相談できる仕組みを整えています。



5月に育休復帰！
仕事と両立できています

短時間の夜勤も
働きやすさのポイント！



緒方さん

無資格・未経験からのスタート
不動産業界で営業職をしていた緒方さん。福祉業界で働く家族の勧めもあり、思い切って転職を決意しました。職場選びではホームページや転職サイトなどから、特に良い雰囲気だと感じた和悦会を選びました。無資格・未経験で不安なことを伝えると、「パート勤務から始めてみよう」と寄り添ってくれたことが入職の決め手。最初は先輩から仕事を教わることも、他のスタッフの働きぶりを観察し、早く仕事を覚えることを心がけていました。そんな緒方さんの働きぶりが認められ、わずか1カ月

他業界への転職は勇気ある一歩が必要です。
今回は他業界から介護職へキャリアチェンジをした、社会福祉法人和悦会 羽曳野特別養護老人ホームの緒方優磨さん(6年目)・竹安優幸さん(6年目)に話を伺いました。また、理事長の村本真吾さんには、法人の人材育成に対する考えをお聞きました。

プランクを乗り越えて
竹安さんは介護福祉士の専門学校を



竹安さん

毎日、利用者を見守っているうちに、普段とのわずかな違いにも気づくことができるようになってきました。例えば、ある利用者が歩行中にふらつきが出ていたため、上司にすぐ報告し、入院・適切な治療につながったこともありました。そういった日々の積み重ねが評価され、来年からセクシヨンリーダーを任されることをうれしそうに語る緒方さん。「入職当時から何かあったらその人に聞けば大丈夫」という憧れの先輩がいます。自分もそんなリーダーになりたいと思います」と今後の意気込みを話しました。

で正社員になりました。また、実務者研修の費用負担を行う、法人の資格取得支援制度を活用することで介護福祉士取得にもつながりました。

憧れのリーダーに

卒業後、介護業界に就職しましたが、さまざまな経験をしたいという思いから他業界へ転職。複数の業界を経て、エステ業界で働いていたときに、コロナ禍によりお店の休業が続きました。

そのため、介護職に復帰することを決め、同じく介護職の姉が在籍する和悦会に入職しました。復帰直後はプランクがあったため、不安もあったのですが、法人の研修制度が充実していることで、安心感につながったと言います。

利用者のセカンドライフを潤ったものに
以前に介護職をしていたときに比べ、要介護度が高い方が多く、復帰直後は利用者の言動に自身の気もちが左右されることもあったとのこと。そんなとき、上司のアドバイスなどから、利用者の生い立ちを知り、言動の意味を考え、「この話で表情が柔らかくなった」などの情報を職員間でこまめに共有することを意識しました。すると、利用者の笑顔が増え、「いつもありがと」と声をかけてくれるように。その瞬間、「介護職員に復帰して良かった」と感じたそうです。現在はリーダーとなった竹安さん。「利用者の第2の人生を潤ったものに」という思いでチームとして日々業務に取り組まれています。



村本理事長

人事考課制度＝成長の機会をつくること

人事考課制度では、スタッフが直属の上司と『自らの成長の目標設定』を行い、その目標に近づけているかを評価します。『新人職員が夜勤に入るまで』『中堅職員が初めてリーダー職に就くとき』など、職員がステップアップする段階はたくさんあります。何事もいきなり任せるのではなく、本人・上司がしっかりと話しあい、自他ともに次のステップに進めるとなった段階で、はじめて任せるようにしています。

また、スタッフによって仕事への向きあい方や大事にしているポイントは異なります。例えば、マネジメントをしてみたいと思う人もいれば、自分の業務に集中したいという人もいます。本人の考えや思いを考慮し、適切な声掛けを行うことを法人として意識しています。

福祉の職場体験、福祉のおしこはコチラから



ふくしを巡る 歴史探訪

No.25

もちつもたれつの社会をめざして

志賀志那人。その名は福祉にかかわる者のみならず、大阪人の誇りとして忘れてはならない存在なんじゃ。東

京帝国大学を卒業後、キリスト教主事として大阪にきた志賀は、その才能を認められ大阪市へ入庁。大正10(1921)年6月に誕生した日本最初の公営隣保事業(※セツルメント)施設であり、「愛の蔭」で知られる大阪市立北市民館の初代館長に就任したぞい。

当時の大阪は「東洋のマンチエスター」と呼ばれ一大商工業都市へと躍進していたが、一方で、天神橋六丁目・長柄付近は劣悪な労働条件や物価高騰の影響で、スラム街となっていた。北市民館は、困窮市民の救済と地域住民の生活力の向上と安定を目的に、歯科などの診療所や図書室、授産場のほか、民生安定所(職業紹介)や質舗などの大規模な隣保施設として、地域住民の暮らしの教化娯楽の

中心地となったんじゃ。志賀は「社会事業は大衆のものである。そして大衆の力によって行われる。ゆえに『救ってやる者』がないと同時に『救ってもらう者』もない」と考えた。与える福祉ではなく、住民自身の時間・労力・財力・気力・知識・技術・資材など、持てるものを提供しあう。内在する地域の力を開発することで生活が向上することを唱えたんじゃ。志賀自らも、北市民館の裏側の公舎に家族で暮らし、銭湯では地域住民と裸の談義や浪花節を斉唱した。こうした、住民とともに歩む志賀の人柄が地域を動かしたのかも

しれないのう。

露天保育所や託児所の設立の一方、愛隣信用組合が1926年4月に大阪府知事より認可を受けると、子を持つ母親たちの共同保育組合を熱心に推進したんじゃ。母親たちの協力により花壇や菜園、小動物や子馬の小屋、昼寝の場所のほか子どもが自然のなかで育ち、憩うことができるように工夫を凝らした郊外園舎を設立。こうした志賀の活躍が、後に比嘉正子をはじめとした多くの優れた福祉人材を生み出しているぞい。

※貧困地域に入り込み、住民との知的・人格的接触を通じて福祉の向上を図ること



北市民会館の模型(大阪市社会福祉研修・情報センター)